

民俗芸能における踊りの動作と呼称の変容 - 「阿波おどり」の構造分析-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2018-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 敦子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19786

民俗芸能における踊りの動作と呼称の変容

——「阿波おどり」の構造分析——

Transformations of Dance Movements and Names of Dance Categories in Folk Performing Arts

——Construction Analysis of Awa Odori——

博士後期課程 情報コミュニケーション学専攻 2015年度入学

小林 敦子

KOBAYASHI Atsuko

【論文要旨】

「阿波おどり」(徳島市)は元来、老若男女の踊り手が自由に集団を作り、身分差や年齢差を忘れて乱舞する盆行事であり、踊りの動作は様式化されていなかった。しかし観光政策(1929～)により踊り手には見られ評価される意識が生まれ、観客は女性の踊り手に対し、女性らしさやセクシュアリティを見出すようになった。このため女性の踊り手は女性らしい美しさを希求して足運びが内輪の爪先立ちとなり、踊りの動作に一定の様式が確立し、「女踊り」と呼称された。男性の足運びも外輪の程度が大きくなり、上肢も男性らしさを強調する動作に変わり、「男踊り」と呼称された。さらに男装の女性による踊りの内、ハッピーを着て「男踊り」をするスタイルが「男踊り」および「女踊り」と並列するスタイルとして台頭し、呼称も「女の男踊り」から「女ハッピー踊り」となった。「女ハッピー踊り」には、「女踊り」と「男踊り」の個々の特徴の様々な組み合わせによる多様なバリエーションが生まれている。本論では「阿波おどり」の踊り手の性や年齢、衣装、踊りの動作、踊りの呼称の変化に着目し、それらを要素とする構造として捉え図示することにより、「阿波おどり」の変容を構造の変化として明示した。

【キーワード】 阿波おどり 観光政策 女踊り 女ハッピー踊り 男踊り

I. はじめに

I-1. 研究の背景および目的と分析の枠組み

「阿波おどり」は藩政期より徳島城下で行われていた盆行事であり、昭和初期から観光政策がとられ、戦後は観光名物として隆盛した。現在では「徳島市阿波おどり」として、毎年8月12日から15日の4日間に徳島駅周辺を中心とする市内6カ所の屋外演舞場と2カ所の屋内舞台が設けられ、約200の「連」と呼ばれる集団が踊りを披露する。この他に交通規制が敷かれた一般の路上でも多数の連が踊りを披露し、この期間の県外客は約120万人である。「阿波おどり」は、踊り手とお囃子隊を擁する連ごとに、2拍子のリズムに合わせて踊りながら行進する形式である。同側の手足（右足と右手、あるいは左足と左手）を同時に出す「ナンバ」と呼ばれる動作で進む。元来は男女差の希薄な踊りであったが、現在（2017年）は女性による「女踊り」、男性による「男踊り」、女性がハッピーを着て踊る「女ハッピー踊り」の3種が様式化している。

本論の目的は、「阿波おどり」の変容過程と変容の要因を明らかにすることである。「阿波おどり」においては多数の連間に競合関係があり、踊りの動作や呼称も常に変化する可能性がある。本論では「阿波おどり」の踊りの動作とその呼称に関する構造を、観光政策がとられる以前の大正期から昭和初期（1910年代～1920年代）と現在（2017年）に分けて分析する。次に、踊り手のプロフィール、衣装、踊りの動作、踊りの呼称に着目し、「阿波おどり」における踊りを、これらの要素が有機的なつながりを保持しながら構成する構造として捉え、図式化する。すなわち「阿波おどり」における踊りの変容過程は、この構造の変容として示される¹。

I-2. 研究手法

筆者は「阿波おどり」の変容を考察するにあたり、まず「阿波おどり」の原形（観光政策がとられる以前の芸態）をとどめているとして無形民俗文化財（徳島県指定）に指定されている「津田の盆（ぼに）踊り」を調査し、現在の「阿波おどり」との相違点を抽出した。さらに新聞や雑誌の「阿波おどり」関連記事および「阿波おどり」関連のテレビ番組などの映像を調査し、これをフィールド調査における「阿波おどり」公演および練習の観察や実践者へのインタビュー内容と突き合わせることにより、「阿波おどり」が現在（2017年）に至るまでの踊りの変容を分析した（小林2014, 2017a, 2017b）。本論はこれらの報告を基に、「阿波おどり」の変容を構造の変化として示す。

「阿波おどり」は全国約60カ所の地域で祭りとして取り入れられており、連は1000程といわれる（阿波踊り情報誌「あわたま」編集部 2015: 111）（筆者注：以下本論では「あわ編」と略記）。本

¹「構造分析」の表記がある舞踊に関する研究として、Kaeppler, A.L. の“Method and Theory in Analyzing Dance Structure with an Analysis of Tongan Dance”（1972）がある。この研究においては、身体の各部分がかどのように動かされているか、またある動作と類似する別の動作が同じと認識されているかどうか分析されている。すなわち踊りの各動作そのものを構造として捉えており、本論における構造分析とは異なる。

論で対象とするのは「有名連」（「徳島市阿波おどり振興協会」および「徳島県阿波踊り協会（徳島支部）」に所属する34連）と呼ばれる徳島市の連である。本論は、「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル」プロジェクト（2016年第3期）による映像視聴の研究成果を含む。また「明治大学大学院生研究調査プログラム助成」（2013, 2015-2017）によるフィールド調査の成果を含む。

「阿波おどり」は観光政策において昭和初期につけられた呼称であり（金沢 1970:39）、徳島県内部では「阿呆おどり」あるいは単に「盆踊り」、外部からは「馬鹿踊り」、「徳島（阿波）の盆踊り」などと呼ばれていたが、本論では「阿波おどり」で統一する。年号の記載は西暦とし、必要に応じ和暦を併記する。新聞資料および映像資料は文末の「引用資料」リストで示し、文中では括弧内に「新聞・リスト番号」あるいは「映像・リスト番号」で示す。

II. 「阿波おどり」の構造（大正期および現在）

II-1. 大正期の「阿波おどり」

観光政策がとられる以前の「阿波おどり」はどのようなものであったのだろうか。「阿波おどり」は徳島城下の人々の自発的な盆行事であり、明治期以降は警察署の通達により許可される形で行われていた（松本 1980:38）。

作家の中野好夫（明治後期から大正期に徳島市在住）は自伝において当時の「阿波おどり」を、「見るものと踊るものの境界線がない」（中野 1985:74）と述べている。中野は、自身の母親がただ見物するつもりだけであったのが、乳児であった中野を背負ったまま踊りの群衆に入り、夜半まで踊っていたエピソードを記している（中野 1985:73-74）。作家瀬戸内寂聴（徳島市出身）は、町内に3-4人は必ず三味線の弾ける男女がおり、お盆に入ると各町内で踊りの連が作られていたこと、子どもたちは3-4歳になると浴衣を着せてもらい、町内の連の中にまじって踊っていたことを記している（瀬戸内 2004:4-5）。このように大正期には、人々が自発的に組んだ集団が増えていき、大きな集団の乱舞となっていったと考えられ、無秩序性が見いだされる。また儀式は伴わず寺社の関与も見いだされないことから、宗教性は希薄であったと考えられる。

小寺融吉（舞踊研究家）は大正期から昭和期（戦前）の「阿波おどり」について、「男が女に扮し、女が男に扮し、或は山伏僧侶或は異様の姿と思ひ〜に趣向をこらす。」（小寺 1922:37）と異装²が行われていたことを述べ次のように記しており、写真1-2に示される様相と呼応している。

踊る者は老若男女、七十の老人からやっ歩ける子供までが急調の三味線、太鼓、鼓、笛に誘い出されること。ふだん苦虫をかみつぶず大商店の旦那も、別人の如く生まれ代わったが如く浮かれ出て、へト〜になるまで踊りぬくこと。思い思いの服装、思い思いの手振りで練歩き、一か所に留まらず、市中は踊り子の洪水になり、二百五十人からの芸妓も揃いの編笠、長襦袢、黒縹子の帯、手甲、脚絆に塗下駄で三味線を弾いて練出す（小寺 1975:128）

² 異装とは、男性の女装、女性の男装、一般人が袈裟を着て僧侶になるなどの変装を指す。



写真1 「西新町商店街の旦那衆」
（『阿波おどり』1980：86）



写真2 「西新町の子供連（大正7-8年頃）」
（『阿波おどり』1980：45）

老若男女による乱舞（異装を含む）

希薄な宗教性・俗界の身分差や性差による制限のない非日常性

図1 「阿波おどり」（大正期・観光政策前）における構造

このような大正期の「阿波おどり」の構造では図1に示されるように、希薄な宗教性および俗界の身分差や性差の超越性が根底にあり、老若男女の乱舞が行われていた。この乱舞には、身分差、年齢差、男女差による差異はなく、決まった様式も見いだされない。

II-2. 現在の「阿波おどり」

大正期から昭和初期にかけては、決まった様式がなく男女差も希薄であったが、現在の「阿波おどり」では、「男踊り」、「女踊り」、「女ハッピー踊り」の3種が確立しており、有名連の踊り手はこの3種に分類されている（あわ編 2015：32-97）³。写真3-5はこれら3種の踊りを示す。

新聞および雑誌の「阿波おどり」関連記事では、「女踊り」には「優雅な」および「しなやかな」という形容句が付され、「色っぽい」というセクシュアリティに言及した表現も頻出している。また動作が統一であるため、「一糸乱れぬ」とも言われる。一方「男踊り」では「力強い」および「豪放」という形容句が付され、「女踊り」における統一性を示す「一糸乱れぬ」とは反対に、「自由奔放」や「個人芸」という表現が見いだされる。「女踊り」と「男踊り」は対句的な形容句が付く対照的な様式の踊りであり、ジェンダー性が明確である。

表1は「女踊り」および「男踊り」の踊りの特徴をまとめたものである。

³ 有名連の中で唯一「のんき連」のみ、2015年より着流しを着て踊る女性を「女着流し踊り」と1つのパートとして位置づけている（2018.4.5「のんき連」連長への問い合わせによる回答）。今後「女着流し踊り」を導入する連が増える可能性もあるが、本論では例外として扱う。



写真3 「女踊り」



写真4 「男踊り」



写真5 「女ハッピー踊り」

写真3-5は「阿波おどり会館」にて筆者撮影（2015.7.21-23）

「阿波おどり会館」：阿波おどり関連の常設の展示および実演を行う1999年設立の徳島市営施設

表1 「女踊り」および「男踊り」の動作と衣装の相違

指標		踊りの様式	
		女踊り	男踊り
踊り手の性（年齢層）		女性（10代～30代中心）	男性
動作	足運び	内輪（下駄の爪先立ち）	外輪
	腰の高さ	腰は低くせずに保持	膝を曲げ腰を低く保持
	上肢の位置	肘は肩より高い位置で保持	肘は肩の高さで保持
	全身のシルエット	垂直方向が顕著	水平方向が顕著
	フォーメーション	常にフォーメーションを組む	自由性と即興性の保持
衣装	着衣	浴衣（頭部には編み笠）	着流し/ハッピー
	履物	足袋と下駄	足袋
	手に持つもの	素手（一部の連で団扇か提灯）	素手/団扇/提灯

フィールド調査より筆者作成

表1からわかるように、「女踊り」は下駄の爪先立ちを保持し内輪の足運びで進み、支持脚の膝はあまり曲げず、肘は肩より高い位置で保持することにより、垂直方向のシルエットが強調されている。動作の統一性が高く常にフォーメーションを組む。「男踊り」はこれとは対照的に外輪で進み、膝を曲げて腰を低い位置で保持し、フォーメーションを組む時もあるが、個々人の自由性と即興性が保持される面がある。表2は、5つの連の「女ハッピー踊り」を、踊りの動作の各要素がどの程度取り入れられているかについて相対比較したものである⁴。「女ハッピー踊り」は女性が「ハッピー」を着て踊るスタイルで、女性が「着流し」（男性用浴衣）を着て踊るスタイルと共に、当初は「女の男踊り」と呼ばれていた。しかし実際には表2に示すように、連により踊りの動作にはかなり多くのバリエーションがあり、「男踊り」および「女踊り」の動作における各要素の多様な組み合わせの芸態となっている。

⁴ 有名連の内「女ハッピー踊り」を保持するのは16連である（あわ編 2015:32-97）。この内、踊りの動作の特徴によりメディアに取り上げられることの多い4つと、有名連ではないがやはり「女ハッピー踊り」としての動作の特異性が取り上げられる「娯座留」とを選択した。

表2 各連における「女ハッピー踊り」の特徴

踊りの要素 連	外輪	腰の低さ	フォーメーション	個性の発揮	手に持つ物
娯茶平	◎	○	○	○	団扇
ゑびす連	○	○	○	○	提灯
娯座留	◎	○	△	◎	団扇
葉月連	◎	◎	○	△	団扇
ほんま連	△	△	◎	△	提灯

筆者の観察により踊りの各要素の相対的な程度の大きなものから、◎・○・△で示すフィールド調査・『徳島新聞』（2001.8.7, 2001.8.9付）等より筆者作成

表2に示される各連の「女ハッピー踊り」の特徴をみると、「娯茶平」は腰をかなり低く保ち足を大きく外輪に出しながら進むという「男踊り」の特徴をかなり備えている。「ゑびす連」では通常は男性が持つ提灯を「女ハッピー踊り」が持ち、腰をある程度低く保っているが足運びにおける外輪の程度は小さく、手先のしなやかな動作等に女性らしさが表現されている。

「ほんま連」の「女ハッピー踊り」は提灯を持って踊るが「男踊り」の動作を踏襲しているわけではなく、足運びはやや内輪であり、何よりも群舞としての統一性を重視している。提灯を動かす動作の軌跡、可動範囲、タイミングはぴったりと揃われ、この点が同じ提灯を持つ「女ハッピー踊り」でも「ゑびす連」とは異なる。また提灯を動かす軌跡は垂直方向が主となっているため、全体のシルエットのイメージは両手を高く挙上したままの「女踊り」に近い。このシルエットのイメージは、団扇を主に水平方向に動かす「男踊り」とは対照的であり、「ほんま連」の「女ハッピー踊り」が「男踊り」を模したのではなく、むしろ「女踊り」の美学が反映されていると言える⁵。

「葉月連」の「女ハッピー踊り」は、「足は、くの字に曲げ、太ももの線が地面と平行になるぐらい腰を下ろすのが理想」（新聞⑩）と、「男踊り」の腰を低く保つ動作をよりいっそう誇張し、ある種デフォルメとも言える動作であり、団扇を持って踊る。しかし、「うちわの向きはそろい、視線さえも同じ。四人の動きは、分身かと思わせるほどぴったりと合っている」（新聞⑩）と言われる程統一性が大きく、「男踊り」の特徴とされる自由奔放とは対極にある。すなわち腰の低さと外輪の足運びという動作は「男踊り」以上、踊りの動作とタイミングをぴったり揃える統一的動作は「女踊り」以上に大きく取り入れている。

「葉月連」や「ほんま連」と対照的なのは「娯座留」であり、初代連長S氏の「型にはまった踊

⁵ 「女ハッピー踊り」は、一般的には30代前半頃に引退と言われる「女踊り」よりも長く踊り手でいられるとされている（小林 2017a: 15）。しかし「ほんま連」では、「女ハッピー踊り」は入連時の年齢が30歳以下と制限されており、逆に「女踊り」は年齢制限がなく、50代も1人いる。「ほんま連」では「女踊り」よりも「女ハッピー踊り」の方が踊りの技術面や体力面で激しくきついため30代までしか踊れないため、このような年齢制限を設けているという（2017.10.1「ほんま連」へのインタビュー）。

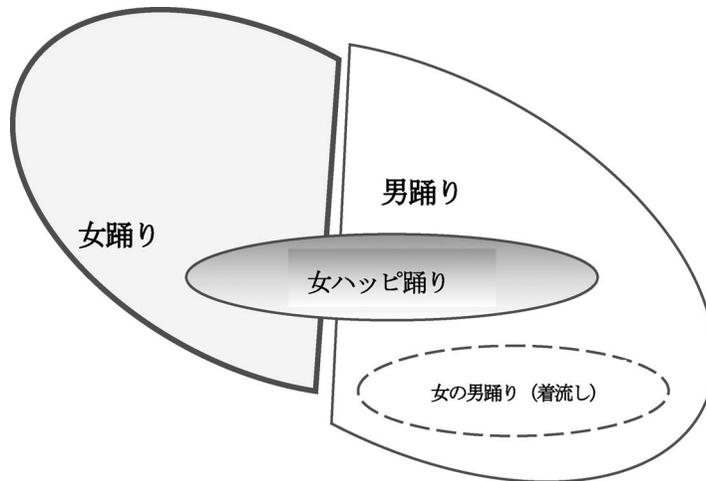


図2 現在の「阿波おどり」における踊りの様式の構造 (2017)

りでなく、自由な踊りこそ心の底の喜びを表現できる」というポリシーのもと、演舞場では一定の統一性を保持するが、一般路上での自由な踊りを大切にしている（新聞⑩）。腰を低く保ち外輪で進むという「男踊り」の動作を保持しながら、男女で踊りの差異が大きくなかった時代の自由な踊りという側面を重視している（新聞⑪）。

このように「女ハッピー踊り」は、女性がハッピーを着て踊る点では共通しているが、「腰を低く保ち外輪で進みながら、個性を発揮して踊る」という「男踊り」の特徴のどの部分をどの程度取り入れるかで、連により様々なバリエーションがある。また「女踊り」の特徴である統一的な集団としての様式美を強く打ち出している「女ハッピー踊り」もある。「男踊り」の動作の取り入れ方と「女踊り」の縦のシルエットが強調された統一的な様式美のどの部分を取り入れるかでいろいろなバリエーションが生まれていると言える。すなわち図2に示すように、対照的な「女踊り」および「男踊り」と、両者の各特徴の組み合わせによる多様な「女ハッピー踊り」が確立している

また図3は、各連における多様な「女ハッピー踊り」の位置づけを示す模式図である。

Ⅲ. 「女踊り」確立の経緯と要因

本項では、まず「阿波おどり」の変容の要因として観光政策について述べ、次に「女踊り」および「男踊り」の確立の経緯と要因を論じる。

Ⅲ-1. 変容の要因（観光政策）

「阿波おどり」に観光政策がとられた1930年頃は、徳島県の経済的基盤であった藍産業の衰退と日本全国における慢性的な不況に昭和恐慌が拍車をかけ、経済的困窮にあった。一方で日本において大衆的規模で旅行文化が定着し（赤井 2016:6-7）、それまで批判の対象であった盆踊りが日本

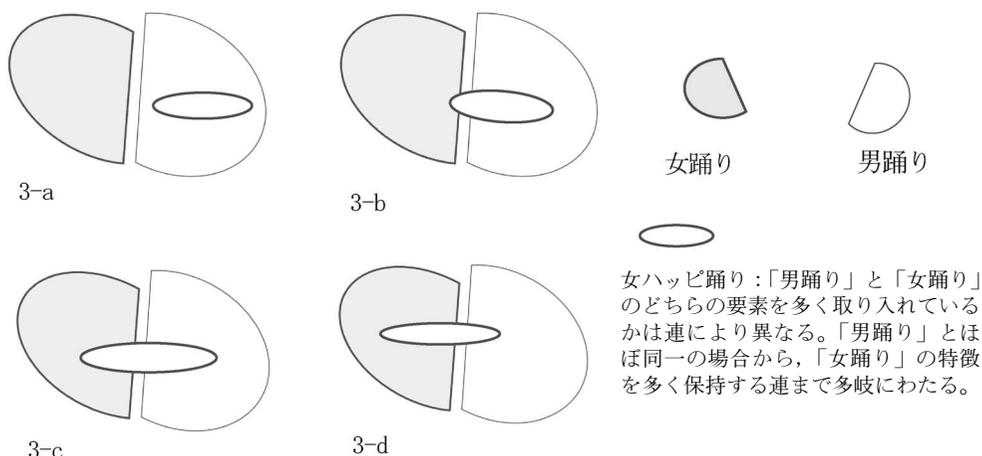


図3a-3d 「阿波おどり」の各連における「女ハッピー踊り」の位置づけ（筆者作成）

踊りの動作の多様性と、その「女踊り」および「男踊り」への類似性の大小を示す

全国で盛んになり、『旅と傳説』（1928年創刊）などの旅行雑誌が創刊され、各地の民俗芸能が掲載され一般大衆にも広く知られるようになった（小寺 1975:147）。徳島市中の盆踊りを観光名物にしようという昭和初期の政策には、盆踊りを観光名物にすることで、活気と経済力を取り戻したいという意向があったと考えられる。

芸妓による単発的な「阿波おどり」の県外公演は大正期にも行われている（関 2007:12）が、本格的な観光政策は1929（昭和4）年に始まった。前年の「昭和天皇御大典」の祝賀踊りの盛り上がりを受けこの年に遊郭事務所前により審査場が設けられ（三好 1980:235-236）、翌々年には商工会議所が管理する審査所において、団体および個人に米等の賞品が贈られた（坂東ほか 2007:32）。

「阿波おどり」の観光化にあたり審査場が設けられたのは、当時の盆踊りが様々な集団により自由に行われており、そのまま観光客に見られて良しとされるものではなかったからである。関口の研究（2007:6-19）によれば、それまでは男性の女装や女性の男装だけでなく、乞食に扮するような変装も見られ（新聞③）、裸になって踊ったり石油缶を叩く者もいた（小寺 1922:37）。また新聞からは低俗として非難され、警察からも規制を受けるものであった。審査基準としては、「1. 服装は古典的のもので整備をしたもの 2. 三絃鳴り物の充実したもの 3. 踊り方の統一したもの 4. 踊と鳴物と服装がピッタリ調和したもの 5. 踊りの団体は十名以上として大衆的なものであること」が記されている（新聞②）。これらは「盆踊りのブランド力を高める取り組み」（関口 2007:6-19）であった。この翌年には日中戦争が始まり、約10年間の中断期に入る（坂東ほか 2007:32）。このように、1936年は「観光阿波おどり」の形が整えられた年であった。

観光政策による踊りの変容はあったのだろうか。審査基準にある「踊り方の統一したもの」の具体的内容についてはわからないが、特に型などは示されていない。しかし、決まった踊り方や流派

や権威的指導者などもなく純粋な楽しみごとであった盆踊りにおいて、観光客向けに衣装などを統一した「よそゆき」の踊りが提示されたという点に着目しておきたい。また地域周辺の路上や空き地を利用して練り歩きながら踊っていた（坂東ほか 2007:31）状況から、「審査場で見せる」ことが中心となった。審査場では多くの集団が集まり審査員や観光客の前で順に踊るため、踊る側も見る側も集団間を比較して見ることになる。観客を満足させることが重視され、連同士の競合も激しい現在の「阿波おどり」の特徴は、このような昭和初期の観光政策により生じたと言える。

Ⅲ-2. 「女踊り」と「男踊り」の確立

本項では、「阿波踊り」における女性の踊り手が広い年齢層から若い世代に限定され、女性の踊りの動作が男性の踊りの動作と差異化し「女踊り」という呼称が確立するまでの過程を論じる。

[女性の踊り手における高齢者の排除]

「阿波おどり」は男女ともに現在の「男踊り」に近い動作で踊っていたが、戦後10年ほどで男女差ができたと言われる（朝日新聞徳島支局 1992:62, 158）。また子どもから高齢者まで誰もが踊れるものとされていた。しかし女性の踊り手は1950年代後半より若い世代に限定されるようになり、現在の「阿波おどり」における「女踊り」は大半が10代から30代の若い女性である。女踊りの主力は1990年代には10-20代となり、連員を募集する際に「35歳まで」等年齢制限を示す連も多い。女性の踊り手の年齢制限はどのような経緯で行われたのだろうか。

『徳島新聞』における女性の踊り手の取り上げ方に着目すると、例えば1950年には、「満月に踊る！ 歓喜の大群像」という大見出しと並んで、「老婆や三つの稚児さんも」という小見出しが、高齢女性と幼児が踊る写真につけられている（新聞④）。ここには老若男女誰でもが我を忘れて踊る「阿波おどり」の特徴が、表現されている。しかし1955年以降は高齢女性はほとんど記事に取り上げられていない。そして、「踊る阿波娘」（若い女性と少女が踊る写真の見出し）（新聞⑨）、「工場内で踊る東邦連の娘踊り子たち」（企業連の写真のキャプション）（新聞⑩）、「阿波娘男踊りですべり出し 徳島駅前」（若い女性達が徳島駅前で踊る写真のキャプション）（新聞⑫）など、「阿波娘」および「娘踊り子」という名称で、10代後半～20代の女性が多く取り上げられていく。

民俗学者の宮本常一は「長い間この踊りを踊ってたのしんで来た老人が踊りを奪われてたのしみがなくなったと話していた一略」と記している（宮本 1967:201-202）。すなわち、高齢女性の排除はメディア上で行われただけでなく、実際に踊る場が失われたと考えられる⁶。この状況を図4に示す。

⁶ 高齢者が一般の路上で踊ることが禁止されたかどうかはわからないが、踊り手も見学者も演舞場に集中する状況の中で、踊りにくくなったということであろう。

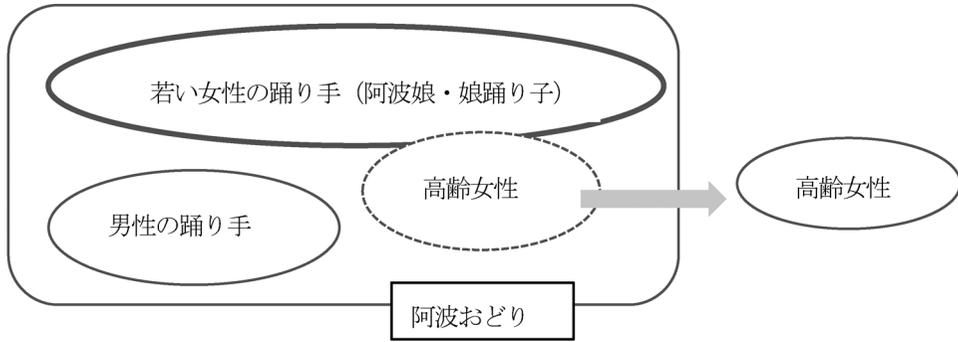


図4 「阿波おどり」の女性の踊り手における高齢者の排除（1950年代後半～）

[女性の踊りの動作の差異化]

女性の踊りの動作において男性の踊りの動作との差異が最も大きいのは、足運びが内輪であり、かつ下駄の爪先立ちを保持する点である。この変容はいつ頃、どのような要因により行われたのだろうか。実際の踊りの動作を映像資料によりみると、1957年制作の映画「集金旅行」の「阿波おどり」のシーンでは、女性の足運びは現在のような内輪ではなく、下駄も「爪先立ち」ではなく「平踏み」である。膝が割れないように遊脚を一度やや「内輪」に接地させるが、男性の踊り手と明確な差異は見出されない（映像③）。1964年放映のNHK番組では、このような「平踏み」と「爪先立ちで内輪」の足運びが混在している（映像①）。さらに1967年制作の映画「喜劇団体列車」では、女性はみな「内輪で爪先立ち」の足運びとなっており、男性とは足運びが明確に相違している（映像④）。徳島新聞紙上でも1967年から「女踊り」という呼称が見出される（新聞⑧）。すなわち、1960年前後に女性の踊り手の足運びが男性とは差異化し、1960年代後半に男性とは明確に異なるスタイルの踊りとして「女踊り」という呼称が確立したと考えられる。

女性による踊りがこのように変容したのは、観光政策により審査場や観覧場において踊り手に「見られる」、「評価される」意識が生まれたこと、女性の踊り手に女性らしさや女性としてのセクシュアリティが見いだされるようになったこと等が挙げられる⁷。例えば女性の踊り手の足運びが変化したのは足元を頻繁に撮影されるようになり、足運びを美しく見せたいという意図からだとされる（2014年10月17日、徳島市営施設「ふれあい健康館」、一般市民向け「阿波踊り講座」参加者で「阿波おどり」歴50年の市民へのインタビュー）。ある18歳の女性の踊り手は、「足の上げ方、女らしい足の表情をと鏡に写して毎日研究中。」とインタビューに答えている（新聞⑯）。

女性の踊り手が10-30代の若い人が中心となり、その踊りが男性の踊りと差異化し、「女踊り」という新しい様式として確立する経緯を、新たな構造の発生として示したのが図4-5である。

⁷ 戦後の『徳島新聞』には、芸能人やいわゆる文化人（作家、画家、写真家等）による「阿波おどり」に関する対談や評論が掲載され、その中でたびたび若い女性の踊りにおける「色っぽさ」、すなわちセクシュアリティに言及されている（1967年8月11日付『徳島新聞』等）。

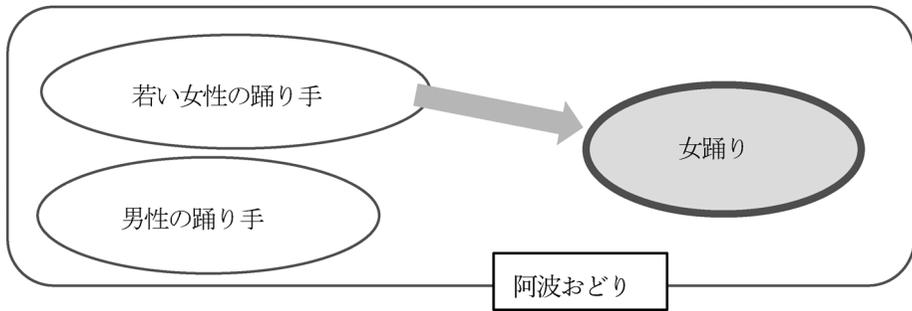


図5 「阿波おどり」における「女踊り」の確立

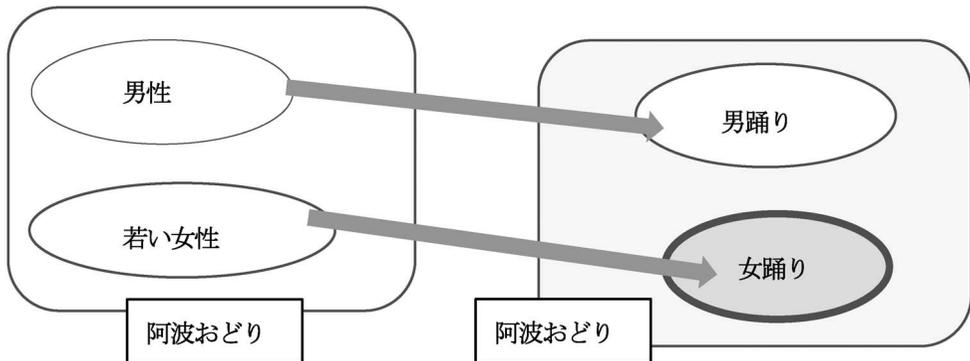


図6 「阿波おどり」における踊り手の性差による踊りの分離（1960年代後半）

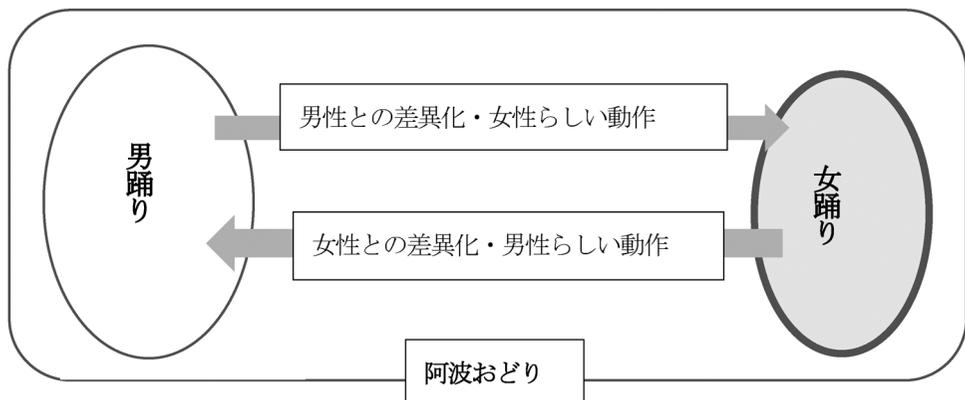


図7 「阿波おどり」の「女踊り」および「男踊り」の確立における両者の相互作用

女性の踊り手が若い世代中心となり、踊りの動作が男性の動作と差異化し「女踊り」と呼称されたことで、男性の踊りに言及される際も図6に示すように「男踊り」と呼称されるようになった。

女性による踊りが「女踊り」として確立し女性らしさが強調されるようになったことで、男性による踊りにも「力強い」、「豪放」などの男性らしさを強調する形容句が付されるようになった。踊りの動作も、1957年の映像資料と現在を比較すると、外輪の程度が大きくなっている。このよう

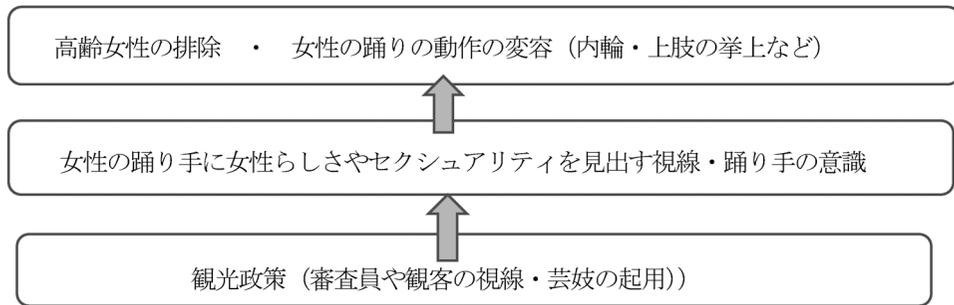


図8 「女踊り」の確立における構造

に、女性の踊り程大きな変化ではないが、男性の踊りにも変化が見られる。これは、女性の踊りが女性らしさを表現する動作に変化したことにより、男性による踊りもそれとは対照的な男性らしさを強調する動作に変化したためと考えられる。図7は、「女踊り」の確立により「男踊り」の方も男性らしい動作が強調され、「女踊り」とのいっそうの差異化が行われたことを示す。

このような「女踊り」の確立の過程における要因と現象を層化して示したのが図8である。

Ⅳ. 「女ハッピー踊り」の確立の推移

本項では、「女ハッピー踊り」が新たなスタイルとして台頭し、現在のような多様な芸態となる過程を、構造の変化として捉え論じる。

Ⅳ-1. 男装の女性に対する批判 (明治～大正期)

「阿波おどり」に限らず、かつて多くの祭りでは男性の女装および女性の男装が行われていたが、明治政府は品性の劣るものとしてこれらを禁じた⁸。特に女性がハッピーを着て踊ることは、「若い女の身空で印半纏に短い半股引、肉付き豊かな太股まで露出して飛び廻る」(新聞①)(印半纏はハッピーのこと、筆者注)と批判され、大正期の新聞紙上においても、「猿股一つに短い法被で女として見られて恥とする胸部や大腿部まで露わし劣情を起こさしむるが如き扮装」(新聞③)と断罪されている。この頃の女性の男装とはどのようなものであろうか。写真6および7は1920年代後半から1930年代における男装で踊る女性であり、踊り手はカフェの女給と遊郭の娼妓である。このように、男装する女性は女性のセクシュアリティを商品とする職業に従事することが多く、現在の「女ハッピー踊り」に女性のセクシュアリティを見出す視線の基層になっていると考えられる。

女性の男装は異装として観光政策では禁じられているため審査場では排除されたが、審査場以外

⁸ 1872年(明治5年)および翌年に布告された「東京府違式誑違条例」および「各地方違式誑違条例」は、明治初期の日本社会と当時の庶民の生活を大きく規制し意図的に方向づけた(春田 1994:33)。異装(女性の男装・男性の女装・僧侶に扮するなど)は、「各地方違式誑違条例」で禁じられている。これは、欧米人に対して恥ずかしくない形に民衆の風俗を矯正しようという意図があった(三橋 2015:129)。



写真6 カフェの女給(昭和初期)
 (『阿波おどり』1980:86)



写真7 南廓・花組の踊り子(昭和初期)
 (『阿波おどり』1980:70)

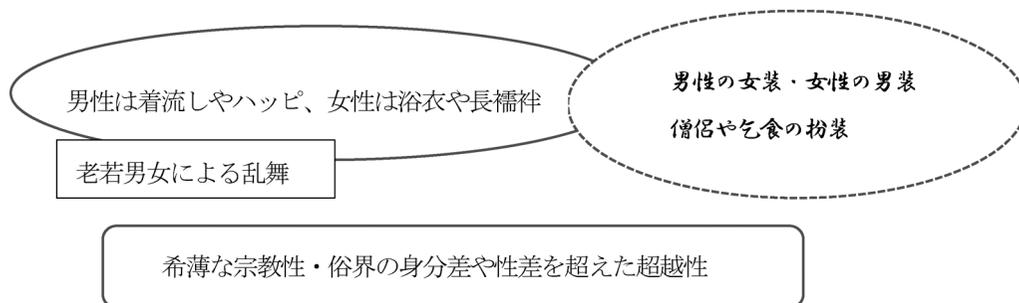


図9 「阿波おどり」(大正期～昭和初期)における異装の位置づけ

では行われ、関心も持たれたので写真が残されているのであろう。このような異装の位置づけと、異装を成立させる「阿波おどり」の基層を図9に示す。

男装する女性に対する視線は、戦後大きく変わる。『徳島新聞』紙上では例えば写真(着流しを着て踊る女性)のキャプションに、「これぞ陶酔境。よろこびを全身に爆発させてお嬢さんの男踊り」(新聞⑥)や、(着流しにハチマキの女性)「男踊りはわたしの得意、ぐっといなせ?女ぶり」(新聞⑦)と好意的な視線や、「女性の男踊り」にある美意識を見出す視線に代わる。さらに、「男踊りで風を切る手足、娘さんの色っぽさ」(新聞⑩)、「(筆者注:胸に)巻いたサラシに色気がにおう」(新聞⑮)、「女踊りにはないお色気」(新聞⑯)、「健康的なエロチシズム」(新聞⑱)、「太ももがまぶしい」(新聞⑲)など、男装して「男踊り」を踊る女性の所作や身体の露出性にセクシュアリィティを見出す視線になっていく。象徴的な記事は「男踊りの阿波女」という大見出しの「男踊り」の女性の特集であり(新聞⑬)、「着流し」や「ハッピー」を着て「男踊り」をする5名の女性を、大写真および身体のいわゆる3サイズと共に紹介している。同年に放映されたNHK番組「新日本紀行 阿波踊り考」では、ハッピーを着て踊る女性が映し出され、「時代を反映してか最近増えてきた女性の男踊りです。」というナレーションが入っている(映像②)。

「ハッピー」を着て踊る女性が男性に混じっているだけではなく、数人のまとまりとして見いだされるのは1970年代からであり、「葵連」、「悠久連」、「野村証券連」などの例が『徳島新聞』紙上で見いだされ(新聞⑫, ⑭, ⑯)、特に「葵連」が多く取り上げられている。実際に当時「葵連」に属していたある女性によると、このスタイルはとても人気があり、この女性も初めは「女踊り」で

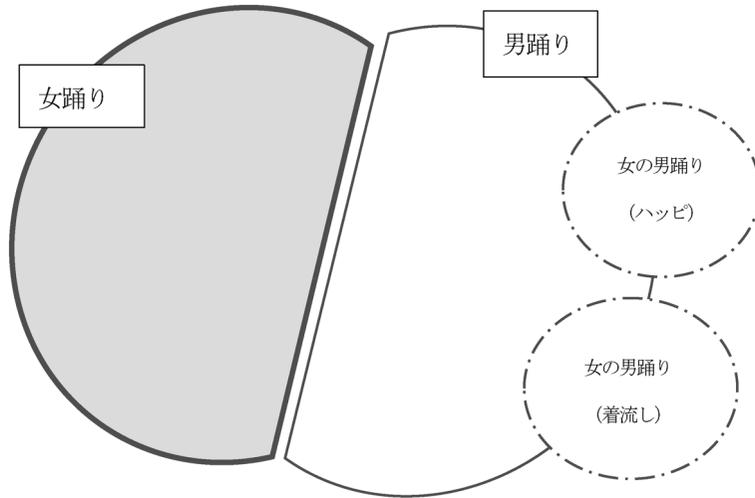


図10 「阿波おどり」における男装の女性の位置づけ（1960年代後半～1980年代前半）

あったが、2-3年後にハッピーを着て「男踊り」に替わったという。しかし「女踊り」や「男踊り」のように様式化されていたのではなく、統一的な呼称もなく「娘っ子の男踊り」（新聞⑭）などと呼ばれていた。

このような「阿波おどり」の構造を図10に示す。この図では「女踊り」および「男踊り」という様式が確立し、「女の男踊り」は様式としては確立していないため、点線で示す。

男装して踊る女性に対する視線の変化は、どのような要因によるものであろうか。明治維新政府による女性の男装禁止令が効力を喪失して久しいこと、また民俗に対する価値観の転換が根底にあると言えるだろう。直接のきっかけとしては、1960年代にパリおよびロンドンでミニスカートが開発されてから日本を含め世界的な流行となり（崎田 1990:1）、1967年にイギリスの女優ツイギーが来日し、彼女が着ていたミニスカートが大流行してから太股を出すことがタブーではなくなったこと、また一部の女性が胸元の大きくあいたデザインの服を着るようになったことがあると考えられる。「女性として見られて恥とする胸部や大腿部」（新聞③）という女性の身体の露出に対する意識が変容したと言える。

Ⅳ-2. 「女ハッピー踊り」確立の経緯と要因

〔「女ハッピー踊り」の前景化〕

男装して踊る女性の内、ハッピーを着た女性のみが「女ハッピー踊り」として1つの独立したスタイルとなり、さらに「Ⅱ-2. 現在の『阿波おどり』」で記したように「女踊り」および「男踊り」の個々の要素を組み合わせた多様な芸態となったのは、どのような経緯によるのだろうか。

「女ハッピー踊り」が「男踊り」および「女踊り」と並ぶスタイルとなったのは、1982年に「娯茶平」および「苧びす連」が、ハッピーを着た女性を一つのパート（集団）として打ち出した事が契機

になっていると考えられる。「娯茶平」はこれより6年前に次世代育成を目的として小学生の集団である「ちびっこ踊り」をパート（男女共にハッピーを着て「男踊り」をする）として取り入れ、人気を博した。この「ちびっこ踊り」の連員が小学校を卒業する際、「女踊り」に移行せずそのままハッピーを着て「男踊り」を続けたいという女子連員のため、連長が着想してピンク色のハッピーを着せて数十名規模の集団としてプロデュースした。また「苧びす連」もこの年に連長が着想し、ハッピーを着て「男踊り」をする女性をまとめて全面に打ち出した（朝日新聞徳島支局 1992:23）。ハッピーを着た女性が「男踊り」をすることは以前よりあったことだが、鮮やかな揃いの衣装を着せ、「男踊り」とは異なる一集団として前景化させプロデュースしたところに、新たな展開が認められる。これが観客にとっても踊り手にとっても人気となり、他の連も取り入れるようになったと考えられる（小林 2017a:14）。

「阿波おどり」は戦後に「女踊り」と「男踊り」に分化し、観客を飽きさせないために、各々のパートを組み合わせていろいろな隊形（フォーメーション）を組む集団舞踊となった。「阿波おどり」が現在のような規律性の高いフォーメーションを組むようになったのは1980年代であり（小林 2017b:6-7）、「女ハッピー踊り」が「男おどり」および「女踊り」と並列する1つのパートとなる時期と重なる。「女ハッピー踊り」のように新たなパートの形成は、1つの連内に新たなヴァリエーションを提供し、新趣向が打ち出せるという利点がある。ハッピーを着て踊っていた小学生が、色彩やデザインの鮮やかなハッピーで「男踊り」を続けるのはスムーズな移行であろう。また観客にとっても、若い女性が鮮やかで露出性の高いハッピーを着て踊ることは、きっちりとした着付けの「女踊り」にはない魅力があるとして人気となった。

【「女ハッピー踊り」への視線】

「女ハッピー踊り」にはどのような視線が注がれ、どのような美学が反映されているのだろうか。「女の男踊り」と呼称されていた時には、身体の露出によりセクシュアリティが見いだされ、また「男踊り」の特徴である「動作の自由性や即興性」が反映されていた。しかし「女ハッピー踊り」という呼称となってからは「Ⅱ-2 現在の『阿波おどり』」で述べたように、「女踊り」および「男踊り」の個々の動作の特徴が様々な組み合わせで取り入れられ、多様な芸態のスタイルとなり、連の独自性が打ち出されている。これは、「女ハッピー踊り」が女性による踊りとして「女踊り」の美学が反映される素地が生じたこと、「男踊り」の動作を一定程度取り入れただけでは踊りの美学が形成されず、各連の独自性も発揮できないこと等が、要因として挙げられる。例えば「ほんま連」が「女ハッピー踊り」を取り入れたのは2005年頃であるが現在の様式が確立するまでにはいろいろな試行錯誤があり、当初は提灯を持って踊る場合に通常とされるように豪快に踊ることを試みた。しかし「一人ひとりが豪快に踊っても美しくない」ために、「本来タブーと思われそうでしたけど、提灯持ってきれいに丁寧に細かく揃うように踊ってみよう、女性にしか出せない繊細さをあえて演出してみよう」と心がけるようになってから人気が出て、さらに入連希望者も増えた（南ほか

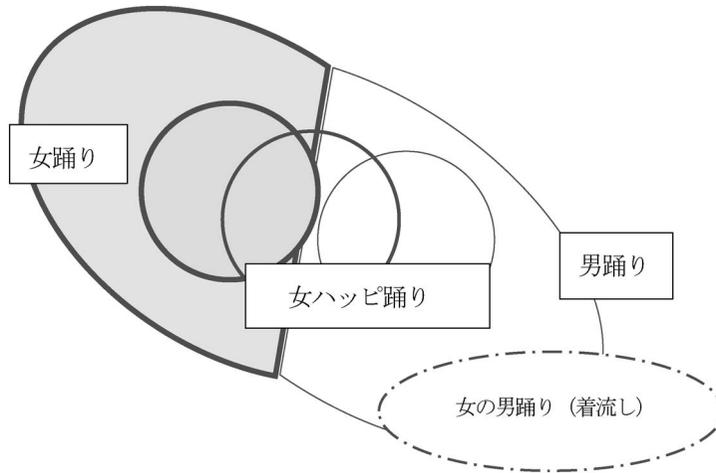


図11 「阿波おどり」(2017)における「女踊り」・「男踊り」・「女ハッピー踊り」の位置づけ

2017:26) という。ここには、女性らしいとされる繊細な動作や統一性の高い動作など、「女踊り」の美学が本来は「男踊り」であった「女ハッピー踊り」に取り入れられてから、観客からも評価されるようになった経緯がある。すなわち「女ハッピー踊り」に、「女踊り」の美学を見出す視線が向けられるようになったためであり、1970年代の「女の男踊り」にはなかったものである。さらに連の競合が激しい中、連の独自性を発揮することが求められていることも、大きな要因であろう⁹。

ところで、着流しを着て踊る女性はどうのような位置づけにあるのだろうか。このような踊り手を「女着流し」として位置づけている連もあるが、「有名連」においては、「女ハッピー踊り」と同等の位置づけにはなく、「のんき連」以外はごく少数の着流しを着た女性が、男性の「男踊り」に混じって踊っている。このような「阿波おどり」の構造を示したのが図11である。

「女ハッピー踊り」の登場は、「男踊り」をやってみたいという踊り手側の女性の潜在的なニーズを満たす。一方観客は、きっちりと着物を着付けて踊る「女踊り」には「上品なお色気」(新聞⑤)という表現に見られるように抑制的なセクシュアリティを見出し、「女ハッピー踊り」には、「女踊りにはないお色気」(新聞⑥)や「健康的なエロチシズム」(新聞⑧)と表現されるように、身体の露出性によるセクシュアリティを見出している。いずれも「男性の観客」が「女性の踊り手」に持っている視点であり、「女ハッピー踊り」は「女踊り」と相互補完的なセクシュアリティを表現するものと捉えられている。「女ハッピー踊り」はこのような踊り手および観客双方のニーズを満たしている。また、現在の群舞としての「阿波おどり」が必要とするパートのバリエーションを提供している。「女ハッピー踊り」は、「男踊り」および「女踊り」とは別の新しい踊りとして隆盛していると言えるであろう。

⁹ 多くの連が、「徳島市阿波おどり」期間中に毎日屋内舞台で行われる「選抜阿波踊り大会」への出演や、屋外演舞場への優先的な出演権を獲得することを目標としており、競合関係にある。

V. 結論と今後の研究課題

本論では「阿波おどり」の踊り手のプロフィール、衣装、踊りの動作、踊りの呼称に着目し、これらを有機的なつながりのある構造として捉え、昭和初期からとられた観光政策による「阿波おどり」の踊りの変容を構造の変化として分析した。その結果、図 1-11 に示されるような「阿波おどり」の構造の変容が見いだされた。「阿波おどり」の踊りのスタイルがこのように新しく生まれたり変容するのは、各連が踊り手とお囃子隊を擁するので独自の芸態を保持できること、観光政策により観客の視線の影響が大きくなり、審美的な観点から踊りが評価されるようになったこと、連同士や連内の連員同士に競合関係が生じ、踊りにおけるインパクトの強さや独自性が求められるようになったことが要因として挙げられる。

本論で明らかとなったのは、観客が踊り手や踊りに見出そうとするもの、メディアでの取り上げられ方、関連する他の踊りとの関係性、「阿波おどり」の連同士の関係性などにより、踊りの動作が変容することである。この背景には、観光政策により各集団間を比較評価する視点が強化され、集団内の芸能としての統一性と他の集団との差異性を各連が希求するようになった点に変容の基盤となっている。これは他の芸能の変容を研究する上でも有効な視点であると考えられる。

明治初期、日本の各地では盆踊りなど民俗芸能が禁じられ、新聞等において西欧に対して「恥ずべき風習」として否定的な言説で語られるのが一般的であった。しかし1900年頃より民俗芸能への視線の変化があり、国家により文化財として認識されるようになった（松尾 2011:252）。戦後は無形民俗文化財指定制度を中心とする保護政策がとられている。大正末期から昭和初期において各地の民俗芸能に観光政策がとられたのは、このような民俗芸能の位置づけの変化との関連が大きく、「阿波おどり」の観光化もこの潮流にあると考えられる。しかし一方、各地で盆踊りが禁じられたにも関わらず「阿波おどり」は途絶えることはなく行われ、また無形民俗文化財に指定されていない。「阿波おどり」の観光化は、民俗芸能に対する視線と政策の大きな潮流上にある側面と、逆にこの潮流からははずれた側面の両方から考察する必要がある。今後の研究の課題としたい。

引用資料

[文献]

赤井正二, 2016, 『旅行のモダニズム：大正昭和前期の社会文化変動』, ナカニシヤ出版

朝日新聞徳島支局, 1992, 『阿波おどりの世界』, 朝日新聞社

阿波踊り情報誌「あわたま」編集部, 2015, 『阿波踊り本Ⅱ』, 猿楽社

春田国男, 1994, 「違式註違条例の研究」, 『別府大学短期大学部紀要』No.13, 別府大学短期大学部, 33-48

金沢治, 1970, 「阿波おどり考現学」, 『徳島案内』, 福家健二編, 徳島：徳島県教育会出版部, 32-40

Kaepler, A.L., 1972, "Method and Theory in Analyzing Dance Structure with an Analysis of Tongan Dance", *Ethnomusicology* Vol. 16, No. 2, 173-217

小林敦子, 2014, 「『津田の盆踊り』における自由な乱舞とぞめきリズム」, 『比較舞踊研究』, 比較舞踊学会, No.20, 1-9

2017a, 「『阿波踊り』における『女踊り』の確立と『女の男踊り』の台頭」, 『舞踊學』No.39, 舞踊学会, 9-

- 2017b, 「『阿波踊りの統一集舞踊への変容』」, 『比較舞踊研究』 No.23, 比較舞踊学会, 1-11
- 小寺勲吉, 1922, 『近代舞踊史論』, 日本評論社出版部
- 1975 (=1941), 『民俗舞踊と研究』, 東京: 図書刊行会, (『郷土舞踊と盆踊』1941年の復刻)
- 松本進, 1980, 「阿波おどり」, 『徳島の研究 7 民俗篇』, 清文堂出版, 1-46
- 松尾恒一, 2011, 「柳田国男と芸能研究, 柳田國男の芸能研究」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』 No.16, 国立民俗博物館, 251-264
- 南和秀ほか, 2017, 『阿波楽』, 猿楽社
- 三好昭一郎, 1980, 「徳島藩と阿波おどり」, 『阿波おどり』, 徳島新聞社編集兼発行, 167-242
- 三橋順子, 2015, 『女装と日本人』, 講談社
- 中野好夫, 1985, 『主人公のいない自伝 ある城下市での回想』, 筑摩書房
- 崎田喜美枝, 1990, 「世界のファッション情報」『宝塚造形芸術大学紀要』 4 宝塚造形芸術大学, 25-46
- 関宏, 2007, 「阿波おどりの“ひろがり”」, 『阿波おどり歴史・文化・伝統』, 阿波おどりシンポジウム企画委員会編集, 徳島: 第二十二回国民文化祭徳島市実行委員会事務局, 123-131
- 関口寛, 2007, 「昭和初期・徳島における観光産業振興と阿波おどり」, 『凌霄』(14), 四国大学附属図書館編発行, 1-23
- 瀬戸内寂聴, 2004, 「身も心も浮かれる『よしこの節』の陽気なりズム」, 『日本の祭り』, 菊池聡編, 東京: 朝日新聞社, 4-5
- 徳島新聞社, 1980, 『阿波おどり』, 徳島新聞社編集

[新聞資料]

- ・『徳島毎日新聞』(徳島毎日新聞社)
 - ①1901年 8月31日 3面 「徳島の真夜中」
 - ②1936年 8月29日 3面 「踊れ! 踊れ!」
- ・『徳島日日新報』(徳島日日新報社)
 - ③1919年 7月27日 3面 「下劣な事は廃めて貰う 盆の仮装について」
- ・『徳島新聞』(徳島新聞社)
 - ④1950年 8月29日 朝刊2面 「満月に踊る! 歓喜の大群像」
 - ⑤1962年 8月16日 朝刊4面 「踊りのなかの阿波ムスメ」
 - ⑥1963年 9月1日 朝刊5面 「初日から踊り一色」
 - ⑦1965年 8月21日 朝刊5面 「せき切って初日の興奮」
 - ⑧1967年 8月11日 朝刊11面 「阿波踊り テレビロケは本番」
 - ⑨1967年 8月18日 朝刊1面 「踊る阿波娘」
 - ⑩1967年 8月18日 朝刊10面 「町や村にも踊りの渦巻き」
 - ⑪1968年 8月15日 夕刊1面 「初踊り 繰り出す」
 - ⑫1969年 8月15日 夕刊1面 「阿波娘 男踊りですべりだし」
 - ⑬1970年 8月16日 朝刊22, 23面 「男踊りの阿波女」
 - ⑭1974年 8月16日 朝刊14面 「どっと見る人踊る人」
 - ⑮1976年 8月13日 朝刊13面 「待ってたハッスル」
 - ⑯1979年 8月13日 朝刊5面 「跳んで! 跳んで! 跳んで!」
 - ⑰1980年 8月13日 朝刊16面 「踊り子自慢」
 - ⑱1988年 8月15日 朝刊10面 「乱舞あてやか阿波女」
 - ⑲1994年 8月12日 朝刊8面 「軽快拍子大うけ」
 - ⑳2001年 8月7日 朝刊28面 「守り変える 1 男ができない男踊り 黒法被」
 - ㉑2001年 8月9日 朝刊28面 「守り変える 3 街角で自由奔放な踊り 喜びの表現」

[映像]

- ・「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアルプロジェクト」(2016年度第3期) 視聴映像
(<https://www.nhk.or.jp/archives/academic/results/index.html>, 2018.3.25 accessed)
- ①「新日本紀行」(1964.9.7放送)
- ②「新日本紀行 阿波踊り考」(1970.8.31放送)
- ・映画の VHS 映像
- ③「集金旅行」(1957年公開, 中村登監督) の VHS ビデオ, 1984年, 松竹株式会社
- ④「喜劇団体列車」(1967年, 瀬川昌治監督) の VHS ビデオ, 発行年不明, 東映株式会社